魔法戦士リリカルなのは 1st　memory

黒衣の戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦士リリカルなのは　１ｓｔ　ｍｅｍｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ２８３７Ｔ

【作者名】
黒衣の戦士

【あらすじ】
記憶を無くした零は一体何を見つけるのだろうかそしてこの戦いの先にいったい何があるのだろうか。
投稿は少し遅く、いろいろなものをパクリながら書いていきますが温かい目で見守っておいてください。

キャラクター紹介（前書き）

初投稿の黒衣の戦士です。
初めてで分かりにくい表現など多いと思いますが楽しんでいただけたら幸いです。
ではキャラ崩壊・オリキャラＯＫの方楽しんでいってください。

ではオリジナルキャラクター紹介始まります。

キャラクター紹介

高町　零（たかまち　れい）
性別　男
年齢　９歳
髪型　色は銀髪で少し長め
眼の色　緑
性格　普通で冷静
一人称　僕
魔力カラー　青
魔力変換スキル　風　炎　水　岩
レアスキル　空間移動
　ある場所に瞬間移動できるワープと違い移動中も攻撃は当たる、魔力消費はかなり高く連続使用はできない。
　空間予想
　一定範囲の周りの状況が予測できる。
好きなもの（こと）
なのは　平和　修行　家事（主に料理）
嫌いなもの（こと）
戦い　甘すぎるもの　辛いもの　アリサ・バニングス　平和を壊す奴
記憶を無くしさまよっているところを高町士朗に助けられ記憶が戻るまで高町家でくらすことになった。

デバイス
名前　レイナ
種類　インテリジェントアームドデバイス
通常時　剣の形のしたネックレス
性格　明るい妹
モード

１ｓｔ　名称　桜
通常時はこのモード、これ以上説明しようがない日本刀。
２ｓｔ　名称　属性によって変化
魔力変換スキルの装備　風炎水砕（フウエンスイサイ）大剣になり、各能力剣に付与（自動的に）、発動中魔力が減っていく。（イメージはフェイトステイナイトのセイバーの剣から不可視能力を抜いたもの）
３ｓｔ　名称　双
日本刀の双剣になる。
あまり話すかわかりませんが一応性格は考えました。

キャラクター紹介（後書き）

まぁとりあえず今のところはこれぐらいです。
新しく設定がきまりましたら番外編などで随時伝えます。

プロローグ（前書き）

どうも黒衣の戦士です。
キャラクター紹介を見ていただいた方ありがとうございます。
では、プロローグ始めていきたいと思います。

プロローグ

雨が降り続いている中を一人の少年が傘もささずに歩き続けている。

「僕はいったい誰なんだろう、そしてここはどこなんだろう」

と一言つぶやくと少年は再び歩き続ける。

そして、翠屋という店の前で少年は倒れる。

「もうだめだ、体力も限界だしもう動けない」

そこで少年の意識は闇に沈む。

すこしして店を閉めようと男性が店の中から出てきた。

男性は店の前で倒れている少年をみつけ声をかける。

「あのー、だいじょうぶですか？」

「・・・・・・」

「どうやら気を失ってるみたいだな、見たところなのはと同い年くらいか、でもこのままじゃ風邪をひくし一応家に連れて行こう。」

男性は少年を抱えると店を閉め、家に帰った。

プロローグ（後書き）

とりあえず少ないですが今回はこれくらいで勘弁してください。

投稿は時間があり思いつくごとに投稿していくのでかなり遅いペースだと思います。

でも最後までよんでいただけたらありがたいです。

ではまた次回。

第一話　目覚め（前書き）

今回からやっと高町家の人が出ると思う。

第一話　目覚め

「うーーん・・・・」
少年が目を覚ますとそこは、普通の家の天井があり自分は布団に寝ていた。

「いったいどういうことだ？・・・えーと、たしか僕は店の前で倒れて・・・なるほど僕は助かったのか。」
少年があれこれ議論していると、とある人物が部屋の中に入ってきた。

「おっ気がついたか、よかったよかった。」

「どこか、まだ具合の悪いところはない？」
と聞かれた。

「とりあえず大丈夫ですが、ここは一体どこですか？」

「ここは高町家、きみは俺が経営している、店の前で倒れているのを見つけて家に連れてきたんだ。」

「そうなんですか・・・ありがとうございます。」

「君、ここに運ばれ来て2日間も眠りっぱなしで心配していたんだよ。」
2日？・・・・・

「えっ・・・二日もここで眠ってたんですか？」

「ああ、もうぐっすりと」
たぶん疲れがたまっていたのだろうと少年は思った。
「そういえばまだ君の名前聞いてなかったよね。
私は高町桃子。」
「俺は、高町士朗、君の倒れていた店のマスターをしている。
君の名前は？」
「僕は・・・あれ思い出せない・・・僕はいったい誰なんだ？」
部屋の空気が一気に重くなった、すると新たに女性が入ってきた。
「おとーさん、おかーさん朝ごはんできたよ・・・ってその子起きたの、はじめまして私は高町美由希っていいます、なんでこの部屋の空気こんなに重いの？」
「えーと、実は僕は記憶喪失みたいで何も覚えて無いんです。」
部屋にいる全員が暗くなる・・・士朗はなんとかひきつる笑顔で、
「じゃあ、記憶が戻るまで、ここで暮らす？」
少年は驚いた、見ず知らずの自分を助けてもらい、しかも記憶が戻るまでここで暮らせるということに
「いいんですか？本当に迷惑かけるかもしれないし」
「私は別にいいわよ。」
「私もいいよ。」
早くもＯＫと返事が来た。

「じゃあ、後はなのはと恭也に返事を聞くだけだな、一応二人に説明してくるから、一息ついたら下の居間に来てくれるかな。」
少年は静かにうなずくと全員が部屋を出て行った。

少年はつぶやく
「ここの子か・・・。」

第一話　目覚め（後書き）

次回、本編の主人公登場します。

感想をかいてくれるとうれしいです。

ではまた次回。

第二話　始まりの朝（前書き）

このペースで更新していけたらマジ楽です。

もしかして少し少ない？

第二話　始まりの朝

どうやら、今日は休日らしい、朝の１０時気持ちの整理がつき少年は居間の扉を開けた。

「・・・・・・・・・というわけなんだ。」

と聞こえたのでちょうど話が終えたところだった。

「俺は別にいいけど、なのははどうだ？」

「私はちょっと、心配だけど・・・もしこの家で暮らすとして、あの子はどこで寝泊まりするの？」

なのはは当たり前のような質問をする、たしかにこの家は広かったがたいして他の家と変わらない、唯一違うとすればなぜか家に道場があるということだ。

「まぁ、道場で寝泊まりできれば、十分だろ。」

ということになった。

扉を開けたまま固まっていたので扉を閉める音でようやく少年がいることに気ずいた。

「おっ、来たね、この二人がさっき言った恭也となのはだ。」

「はじめまして、高町恭也だ。」

「はじめまして、高町なのはです。みんななのはって呼ぶから君もなのはって呼んでね。」

全員の自己紹介の済んだところで問題が起こった。

「この子、なんて呼べばいいの？」

それもそうであるこの少年は記憶を無くしているので名前もわからない、どう呼べばいいのだろう。
「じゃあ、僕の名前は高町零でいいかな？」

「・・・自分で思いついたのか？」

「はい・・・そうですけど何かまずかったですか？」
不思議そうな顔で士朗に聞く。

「いや・・・この短時間で思いついたことに驚いてね、何かエピソードでもあるのかな？」

「えーと・・・記憶がないつまりゼロ、からゼロの他の読み方で漢字にできるのはこの読み方なので・・・この名前でいいかなって思っただけですが・・・。」

真顔で答えられ部屋の空気が重くなったが少年の名前は高町零に決まった。

第二話　始まりの朝（後書き）

やっと高町家全員＋αを紹介できました。

次からはゆっくりと魔法の要素をくみこんでいきたいと思います。

零「この小説、俺が主人公のはずなのに名前の登場が一番遅いってどういうことなのかなー？・・・レイナ、セットアップ。」

作者「ちょっ、まだ出してないキャラ呼ばないでー。」

零「問答無用、２ｓｔモード炎、おらぁ」

作者「ちょっやめいこれ以上のネタばれは・・・ぎゃあああああ。」

零「大丈夫、峰打ちだ。」

作者「２ｓｔモード峰ないよ。」

ばたっ・・・・・・・・・・・・

第三話　これから先のこと（前書き）

ホント誰か読んでください、マジで泣きそうです。

第三話　これから先のこと

とりあえず場の空気が安定してきたとき士朗が零にいった。
「とりあえず、記憶が戻るまでは零君も家族の一員なんだし、俺のことはお父さん、桃子のことはお母さんと呼んでくれ。」

士朗の提案に零は少し驚いたがこれからのことを話すことにした。
「士朗さん、さすがに泊めてもらうだけでもありがたいのに、やっぱり家族の一員として過ごすなら、お店の方とか手伝ったりしたいんですけど・・・」

「・・・」
零は提案してみるが士朗は答えない。

「父さん、・・・・」
呼んでみると、士朗は
「たしかに、お店の前で広告を配っていたら、零の知っている人が声をかけてくれるかもしれないな、よし、じゃあ次の休日から働いてくれるかな？」

「ありがとう、父さん・・・って次の休日から！僕、平日の間、何をしておけばいいの。」
零が士朗に聞く。

「あっ、まだいってなかったっけ、平日はなのはと同じ学校の同じクラスに行くことになったから。」

「えええ！！そんなの聞いてませんよ。」
その話を聞きなのはも、ふぇぇぇと言いながら驚いている。

「あたりまえじゃないか、零はほぼなのはと同い年なんだから、義務教育はちゃんと受けないと。もう編入手続きはすんでるから、明日から学校頑張ってね。」

「父さん、いきなり明日からって言われても、教科書もないし、たしかなのはの通ってる、聖祥大付属小学校って制服ですよね、どうやって通うんですか。」

桃子は隣の部屋から箱を持ってきた。

「零君が寝てる間にいろいろ済ませておいたんだけど制服とかはやっぱり間に合わなくて恭也のなんだけど一回着てくれる？」

零は仕方なく制服を着てみると以外にピッタリですごく似合っていた。

「制服はこれで大丈夫、教科書は明日、学校でくれるらしいから安心だな。」

「とりあえず今日は海鳴市周辺でも案内しますか。」

と零は美由希に手を引っ張られでかけることになった。

第三話　これから先のこと（後書き）

作「いやーそろそろグダグダになってきたなー」
なのは「まぁ、思いつきで始めたんだから遅かれ早かれなると思っていたけどね」
零「てか、この小説まだ魔法とか全然出て無いし、次の話どうするの」
作「うーん、いろいろ考えた結果案内はオールカットにしようかなって思っています。」
零「このだめ作者」
作「すいません」
なのは・恭也・美由希「そういえば私たち最近出て無いね」
作「とりあえず魔法がかかわってきたらなのはの登場回数増えるかも、他の人たちは零に剣の修業させようと思っているのでその時にだそうかと思っています。今回いろいろとドわすれのとこが多くてさなのはのアンソロジー読みながらうったんだよねー」
まぁ後2話ぐらい先に魔法出していきたいと思います。
みなさんの感想を見るとやる気がでますので呼んだ方いろんな人にひろめていってください。

第四話　登校開始（前書き）

やっとお気に入り登録してくれる人がいました。
ありがとうございます。
Ｔｗｉｔｔｅｒなどで広めてくれるとうれしいです。
感想や間違いなど送ってくれるとありがたいです。

第四話　登校開始

昨日は美由希に連れられて海鳴市の周辺を回ることになった。
翠屋の場所や商店街など、家に帰ると零の歓迎会などいろいろなことがあった。
歓迎会の後、学校の行き方や先生のことなどなのはと話し結構、打ち解けていった。

次の日の朝・・・
「やっ、はっ・・・」
という掛け声が聞こえてきて零は目が覚めた。

扉をあけると美由希と恭也が剣道の練習試合をしていた。
「ごめん、起しちゃた？」

美由希は零に気づくとあやまった。
「大丈夫ですよ、丁度いいぐらいの時間に起きられましたし、そういえば毎日ここで剣道の練習してるんですか？」

「そうだよー、恭ちゃんは二日に一回ぐらいだけどね。」
美由希は恭也からタオルを受け取り汗を拭きながら答える。

しかし、零にはちょっと違和感があった。
「でもさっきの一戦ちょっとおかしくありませんでしたか？」

恭也は少し驚いた顔をして答えた。
「ああ、家に伝わる、父さん直伝の剣術なんだ。」

恭也の答えに美由希が付け加えるように

「でも、普通の剣道とあまりかわらないけどね。」
恭也があることを提案する。
「もしよかったら明日、朝練いっしょにやってみるか？」
美由希は最初から思っていたのか即答する。
「私は別にいいし、家の剣術と普通の剣道の違いが見分けれるなんて珍しいしもしかしたら、記憶を無くす前、剣道やっていたのかもしれないし、やってみたら記憶を思い出すヒントになるかもね。」
「じゃあとりあえず、明日だけやって続けられそうだったらずっとやっていきます。」
零は剣道をやっていた二人がとてもかっこいいと思った。

・・・数十分後

身支度を済ませ剣道を見学していた零たちを制服姿のなのはが呼びに来た。
「おねーちゃーん、おにーちゃーん、零君、朝ごはんだよ。」
恭也はおはよう、なのは、と短く答え、美由希もおはようと答えた後、なのはにあたらしいタオルをうけとった。
「おはようございます。なのは。」
なのはは、笑いながら、
「普通に言ってよ零君。」
零は笑いながら
「おはよう、なのは。」
とこたえると、なのはは、

「おはよう、零君。」

朝の挨拶を済ませた後、四人は居間に向かった。

居間では士朗が、新聞を読みながらコーヒーを飲んでいた。

四人が部屋に入ると士朗と桃子が

「おはよう、零君。」

と零だけに言った、もう三人は挨拶してるのかと思い零は、

「おはよう、父さん、母さん」

慣れたのかそうよんだ。

なのはと美由希・恭也・桃子が席に着くと、零は余っている席に座り、全員は

「いただきます。」

と言って食べ始めた。

食べている間、士朗と桃子がイチャついていて、驚いたがなのはが

「いつもの光景だから気にしなくていいの。」

と言ったので気にせず朝食を食べ終えた。

零は道場からカバンをとってくるとなのはが門の前で待っていて、士朗と桃子も玄関にいた、零となのはは同時に

「「いってきます。」」

と言って出発した。

第四話　登校開始（後書き）

作「ふーやっと登校のところまで書けた。」
なのは「わたしと零君がどういう話で打ち解けあったのはオールカットなんだね。」
作「ちょ・・・ダークネスオーラを展開してデバイスをつきつけないで怖すぎるから。えーと次からはなのはの友達と零の苦手な相手が登場じゃまた」
なのは「遺言はそれでいいの？」
作「ちょっと、まってーーー。」
なのは「スターライトブレイカー」
ちゅどーーーん
作「この悪魔め・・・」
がくっ

第五話　転校生の宿命（前書き）

もしかして、結構読んでる人いてる？

第五話　転校生の宿命

聖祥大付属小学校は海の近くにある学校である。

この学校はバス登校なので、なのはと一緒にバスに乗った。

バスの一番後ろの席になのはの友達の月村すずかとアリサ・バニングスが座っていてなのははその真ん中に座って話を始めた。

零はあいている席に座って空を眺めていた。

すずかは心配そうな顔でなのはに聞いた。

「今日、なのはちゃんと一緒に乗ってきた男の子ってだれなの？」

「もしかして、なのはにつきまとってるストーカーじゃないでしょうね」

アリサは怒りオーラを全開にしてなのはに聞く。

そのオーラに近くの男子は少し震えている、零も背筋に悪寒が走った。

なのははにゃははと笑いながらアリサの怒りをしずめる答える。

「大丈夫、今日は一緒だっただけなの。」

「まぁいいわ、なのはが大丈夫っていうなら大丈夫よね。」

アリサの怒りオーラが少し弱まる。

「で、なのはちゃんあの子の名前知ってるの？」

すずかが余計な質問をした。

「学校につくとわかるから。」
と一言答えると、強引に話の流れを昨日のテレビの話にした。

数十分後・・・

学校に到着しバスをおりた零は一度、伸びをし深呼吸をしあいさつのため職員室を探しに校内に入った。

数分後・・・

「うーむ・・・すっかり迷子だ、職員室どこだろう・・・。」
零は校内で迷子になっていた。

すると前から先生らしき女性がいたので職員室の場所を聞くことにした。
「すいません、あの今日からこの学校に通うことになった高町零なんですが、職員室ってどこにあるんですか。」

先生はあーこの子かという顔をしながら答えた。
「私はあなたの担任の鈴本結衣です。職員室に行くのはいいけどもう時間がないよ。」

零は若干、驚きながら
「えーと、職員室に行こうと思ったのは担任の鈴本先生にあいさつに行こうと思ったからなんですが行く必要がなくなりましたね、今日からよろしくお願いします。」

あいさつがすんだ瞬間チャイムが鳴ったので零は案内されるように教室に行った。

先生が教室に入ると、零は少し廊下で待っていた、教室の中であいさつが聞こえた後、当たり前のように、

「今日から、このクラスに新しい人が一人増えまーす、みんな仲良くしてあげてくださいね。」

と言うと同時に生徒から「男女どっち」、という質問が来たので、普通に

「男の子でーす。・・・では、転校生君入ってきてください。」

零は緊張しながら一礼して教室に入った、すずかは、

「っあ、あの子ってバスになのはちゃんと一緒に乗ってきた。」

と小さな声で呟く。

零は一礼し自己紹介を始める。

「はじめまして、高町零です、えーと僕はいろいろあって今、高町さんの家でくらしています。これからみんなと仲良くしていけたらいいと思っています。よろしくお願いします。」

自己紹介が終わり、拍手が終わると先生が、

「じゃあ、零君は高町さんの横が空いてわね、そこに座ってください。」

と言われ、席に座ると同時に、チャイムが鳴り、朝のＨＲが終わった。

先生が教室から出るとクラス全員が零の周りに集まった。

「ねぇねぇ、零君ってどうして高町さんの家で暮らしてるの？」

「趣味とか好きなものは？」

「得意教科は何？」

などの無限の質問地獄になった。

第五話　転校生の宿命（後書き）

作「あー、先生の名前考えるの疲れた。」
なのは「たしか家の資料のどこにものってなくて自分で考えたんだっけ。」
作「そうですよー、最終的にあるキャラをパ・・・ゲフンゲフン、自分で考えたんだよねー。でも必死に考えた割に登場回数が少ないんだよ。」
零「テスト前に何やってんだよ。」
作「まぁ、いいじゃん、どんなテストかわかんねーし。」
零「まぁ、頑張れ。」
作「ありがとう、まぁつぎは授業オールカットで番外でも書こうかなーと思っています。では」
なのは・零・作「さよならー」

番外編　キャラ補足説明（前書き）

キャラのイメージがようやく固まってきたので書いていきたいと思います。

番外編　キャラ補足説明

高町　零　（セット・アップ時）
眼の色　赤
一人称　俺
それ以外は変わらない。

１ｓｔモード桜　剣の名称　ニバンボシ

２ｓｔモード　風の時　シルファリオン
常に風をまとっている　移動・攻撃スピードが上がるが、威力が下がる。

炎の時　エクスプロージョン
常に炎をまとってる剣　剣が何かに触れると爆破することができる。攻撃力は上がるがスピードは変わらない。

水の時　ヴォーバル
常に水をまとっている剣　地面に突き立て水の水壁を作ることが、可能、攻撃・防御に使用可。

砕の時　サクリファイス
普通の大剣の状態だが、剣を地面に突き立て石槍を発生させる、唯一の物理ダメージを与えれる（２ｓｔの中で）

３ｓｔモード双　一本はニバンボシ、もう一本は明星二号

技（２ｓｔでは発動不可能）
紅破刃（こうはじん）

対象　一人

赤色の衝撃波を飛ばす。

紅破追蓮（こうはついれん）

対象　一人～二人

赤色の衝撃波を二個飛ばす。

１ｓｔなら二発目まで少し時間がかかるが、３ｓｔなら同時に発射可能。

紅狼撃（こうろうげき）

対象　一人

１ｓｔ専用、剣での突きの後、拳で殴る。

幻紅斬（げんこうざん）

対象　一人

剣で斬りつけながら敵の背後に回る、３ｓｔでは攻撃回数が増える。

紅破牙狼撃（こうはがろうげき）

対象　一人

１ｓｔ専用、紅破刃を飛ばした後、紅狼撃で攻撃　ガードブレイク付加。

守護結界（しゅごけっかい）

対象　・・・

防御技、発動中少し傷が治る、死角からの攻撃も防ぐが魔力消費が多いので連続使用はできない。

紅龍連牙斬（こうりゅうれんがざん）
対象　一人～数人

回転しながら前進し斬りと蹴りを交互に繰り出し攻撃する、（３ｓｔでは使用が難しいので使用しない）。

紅月狼影陣（こうげつろうえいじん）
対象　一人～数人

対象内にいる敵を何度も斬りつける。１ｓｔモード専用の必殺技。

天翔紅翼剣（てんしょうこうよくけん）
対象　一人～数人

攻撃範囲内にいる敵を輝く翼となった剣で斬り裂く。３ｓｔモード専用の必殺技。

天狼滅牙・風迅（てんろうめつが・ふうじん）
対象　一人～数人

２ｎｄモード・シルファリオン専用の必殺技、連続で斬った後、風圧で吹き飛ばす。

天狼滅牙・飛炎（てんろうめつが・ひえん）
対象　一人～数人

２ｎｄモード・エクスプロージョン専用の必殺技、炎のまとった剣

で連続で斬り、最後に大爆発を起こす。

天狼滅牙・水蓮（てんろうめつが・すいれん）
対象　一人～数人

２ｎｄモード・ヴォーバル専用の必殺技、連続で斬った後、剣を地面に突き立て巨大な水の壁を発生させる。水壁にふれると水圧でつぶされる。

天狼滅牙・砕覇（てんろうめつが・さいは）
対象　一人～数人

２ｎｄモード・サクリファイス専用の必殺技、連続で斬った後、剣を地面に突き立て石槍を多数発生させる。唯一の物理攻撃でガードブレイク付加。（イメージ的にはテイルズシリーズのグランドダッシャー）。

作者
性別　男
年齢　１８

大学一年、この作品の作者いわばこの物語の神、物語の誤字・脱字・更新の遅れはこいつのせい。
あとがきでほぼ毎回制裁を受けている。

出番、減らし
対象　このキャラ一人ぐらい

対象キャラクターの出番を減らす。

番外編　キャラ補足説明（後書き）

やっと技とかいろいろ固まってきました。
これから、大学が忙しくなるので更新が遅れるけど続けて呼んでくれると幸いです。
感想を送ってくれるとやる気が出ます。

作者「いやーつかれた、書きながら技名考えるのがこんなにしんどいなんて。」

零「まぁ疲れるのはわかるけど、この技や武器の名前っておもいっきりテイルズとＲＡＶＥのパクリだよな。」

作者
「出番減らすぞ。」

零「ごめんなさい。」

第六話　下校（前書き）

今回、とても短いです。

第六話　下校

一日の休憩時間をすべて質問に使われヘトヘトになったが、なんとか無事に終わりのＨＲをむかえた。
「では、零君は帰りに職員室に寄ってください。・・・ではみなさんさようなら。」

あいさつを終え生徒の大半が教室の外へ出た後、伸びをしているとなのはが話しかけてきた。
「にゃははは、大変だったね零君。」

「まったく、本当につかれた。」
なのはが零と話していると、すずかとアリサが寄ってきた。

「なのは、今日、塾あるけどこれからどうする？」
アリサがなのはに聞く。

「うーん、塾まで時間まだあるし、零君に町でも案内してあげようよ。」
すずかはなのはに提案する。

「えっと、昨日美由希さんといろいろ町案内されたんだけど。」
零は答えると、なのはは言う、

「じゃあ、今日夢に出た公園に行こうよ。」
なのはの提案に零とすずかとアリサは

「どうして？」

「えっと・・・結構、繊細な夢だったし塾の近道だし、塾行く前に零君を翠屋に案内してあげれるから・・・」

アリサとすずかと相談していた

「私は別にいいけど」

「すずかが行くなら私もいく」

アリサとすずかは決まった。

「（まぁ昨日一日じゃちょっとあいまいだしな）僕もいいよ。」

零は返事をした後、職員室に行き教科書をもらい、なのはたちと合流した後、下校するのであった。

この近道が、二人の運命を大きく変えることになるのを知らずに

第六話　下校（後書き）

次にやっと出るかなーユーノ君、どうやってレイナ登場させよう？
まっ次回もお楽しみに。

第七話　赤い宝石とネックレスとフェレットと（前書き）

ユーノ君登場。
感想お待ちしています。

第七話　赤い宝石とネックレスとフェレットと

教科書を持っている零は、全く疲れて無い様子でなのは達と話しながら公園の中を歩いていた。

「よく、そんな重たいものずっと持って疲れないわねー。」
アリサは少し感心しながら零に話しかける。

「ちょっと、重たいけど疲れるってほどじゃないし学校の質問攻めに比べたら楽な方だよ。」
なのは達はその答えに同時に苦笑いし、アリサは近道を見つけて少し走る。

「こっちこっち、ちょっと道悪いけど近道なんだよね。」
アリサは自慢するように答える。

四人はその道を歩いていると、
『助けて・・・』
という声が聞こえてなのはは振り向く。

「？どうした、なのは」
零は聞く。

「今何か聞こえなかった？」
なのははすずかとアリサと零に聞く。

「・・・私は聞こえなかったわよ。」
「私も・・・」
「僕もきこえなかったけど」

三人が答えるとまた

『助けて・・・』

とこんどは、はっきり（なのはのみ）に聞こえ、なのははその方向に走って行った。

零たちも走ってなのはを追いかけると、傷ついたフェレットを抱きかかえるなのはがいた。

「どっ、どうしよう。」

なのはは三人に聞く。

「どうしようって、とりあえず病院？」

「「獣医さんだよ。」」

零とすずかは同時に答える。

「この近くに獣医さんってあったっけ？」

なのはは三人に聞く。

零は、まだ完璧に海鳴の町を知っているわけではないので、あたりを見ているとヒモの付いた赤い宝石と剣の形の飾りのついたネックレスを見つけて拾う。

「とりあえず、家に電話してみる。」

なのは達の方もすずかが家に電話することで片付いたようだ。

・・・約三十分後・・・

とりあえず四人はすずかの呼んだ車で槇原動物病院にフェレットを連れていった。

治療が終わり、心配しそうにしているなのは達に言う。

「けがはそんなに深くないし、命に別条はないわ。」

そう聞くとなのは達は安心したような顔になる。
「「「「院長先生、ありがとうございます。」」」」
と四人同時に答えた。

「これって、フェレットですよね、どこかのペットなんでしょうか？」
アリサは院長に聞く。

院長は困った顔をして
「フェレットなのかなぁ？ずいぶん変わった種類だけど・・・。」

零は心の中で、
『おいおい、獣医さんがそんなんでいいのか』
と少し思っているとポケットの中に入れていた、赤い宝石と剣の形をしたキーホルダーを取り出す。

なのはは聞く
「零君、それどうしたの？」

「えっ、そのフェレットの倒れてた近くに落ちてたんだよ。」
と答え終わるとフェレットが目を覚ました。

フェレットは不思議そうな顔であたりを見回すと、台の上に置いた赤い宝石とキーホルダーのほうに近づきなのはの方を見つめる。
なのははそっと手を近付けるとフェレットはペロッとなのはの指をなめ、また気絶した。

「しばらく安静にした方が良さそうだから、明日まで預かっておこうか？」

と院長は聞くと、四人は

「「「「「はい、お願いします。」」」」」

と答える。

「そういえば三人とも塾があるんじゃなかったっけ。」

零は三人に聞くと

「あっやば、塾の時間！！」

なのは達は院長先生にお礼を言いながら塾へ走って行った。

零を残して・・・

「僕、どうしよ・・・」

はー、とため息をつき院長さんに地図を借りてとりあえず翠屋に行くことにした。

第七話　赤い宝石とネックレスとフェレットと（後書き）

やっと、ユーノ君が登場しました。
つぎは夜の戦い。
ここが腕の見せ所、頑張ります。

第八話　手に入れた魔法の力（前書き）

体力的な問題で戦いまで入るかなぁ？

第八話　手に入れた魔法の力

なのは達が塾に行ったあと、零は一人地図を見ながら翠屋を目指していた。
「まったく、せめて合流場所ぐらい決めてくれればいいのに。」
とため息交じりに独り言を言っていた。

・・・数分後・・・
「やっと・・・ついたか。」
零は翠屋に無事辿り着いた。

翠屋の扉をあけると、客は一人もいずカランコロンという音が響き店の奥から士朗が出てきた。
「おかえり、零君・・・あれ、なのはは？」

「はー・・・僕をほって塾に行きましたよ。」
零は士朗が出してくれたアイスティーを飲みながら答えた。

「じゃあ、これかたずけたら閉店時間だから家に帰ろうか。」
士朗が立ち上がると同時に零はアイスティーを飲みほし厨房で洗い物をしている士朗にコップ渡し外に立てている看板をかたずけた。

「ありがとう、零君じゃあ帰ろうか。」
士朗は翠屋のシャッターを下ろすと歩き始めた。

「零君、どうだい学校の方は。」

「うーん・・・まだ一日目でよく分からないけど、今日の質問攻めはきつかったよ。」

零は笑いながら答えると士朗も少し笑った。
家に着いてリビングでテレビを見ているとなのはが帰ってきた。
「「「「「「おかえり、なのは」」」」」」
なぜか五人共同時に返事し笑いが生まれた。
笑いがおさまるとなのはは
「ごめん、零君塾に急いでたからおいてちゃて・・・」
なのはは申し訳なさそうに言う。
「大丈夫、ちゃんと帰ってこれたし、でも次からは注意してよ。」
と笑いながらなのはの頭をなでた。
・・・その後、夕飯を食べ、寝る準備をした後、零は寝るために干しておいた布団を引いていると玄関が開く音がした。
「ん？・・・こんな時間にだれか出かけるのか。」
零は玄関の方を見ると、私服姿であたりをみまわしながらなのはが出かけて行った。
零は不思議に思いなのはに気付かれないように、なのはについていった。
零がなのはを追いかけると昼間の動物病院に着いた。
すると近くで何かが動物病院の壁に突っ込んでおり、横にフェレットを抱えたなのはがいた。
「なのは！！勝手に出かけたことはいいとしてあれなんだよ？」
フェレットを抱えた、なのはに聞く。

「わかんないけど、また昼間みたいな声がしてここに来たらこんなことに・・・」
零となのはは目の前にいるものが何か考えていると、
「あれは、ジュエルシードが反応して作り出してしまった化物です」
と聞きなれない声がした。

なのは達が声の主を探すと、フェレットが二足歩行で話しかけてきた
「「しゃべった！！！」」
なのはと零は少し驚いたがすぐに落ち着きとりあえず動物病院を離れた。

なのはがフェレットを抱えながらフェレットは話し続ける
「君たちには素質（そしつ）がある・・・だからお願い少しだけ力をかしてくれませんか？」

零となのはは頭に？マークを浮かべながら
「「素質？」」

フェレットは構わず続ける
「僕は、ある探し物のためにここではない世界から来ました。でも僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だから迷惑だとわかっていても素質を持っている人に手伝ってもらおうと・・・お礼します必ずします、だから君たちに僕の持っている力、魔法の力を使ってくれませんか。」

零となのはは頭に？マークを浮かべたままで
「「魔法？」」
零は何言ってんのこのフェレットはと思っていた。

しかしこの空気を破壊するようにさっきの化物が突っ込んできた。

零となのははとっさにかわし話が続けられる
「お礼は必ずしますから・・・」
零は呆れたように
「今は、お礼とかそんな場合じゃないだろ」
と少し怒りながら言う。

「どうすりゃいいんだよ。」
フェレットに聞くと、フェレットは赤い宝石と剣の飾りのついたネックレスを零となのはに渡す。

「これを手に目を閉じて心をすまして、僕の言うとうり繰り返して・・・いくよ!!」
二人はこくりとうなずく。

「我、使命をうけし者のなり」

「「我、使命をうけし者のなり」」

「契約の元、その力を解き放て」

「「契約の元、その力を解き放て」」

「風は空に、星は天に」

「「風は空に、星は天に」」

「そして、不屈の心は、この胸に」

「「そして、不屈の心は、この胸に」」

「「「この手に魔法を」」」

「レイジングハート」

「レイナ」

「「「セットアップ」」」

「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ　ｕｐ」

となのはの方からは機械の女性のような音声が

「スタンバイ　レディ　セットアップ」

と零の方からは女の子みたいな声が発せられ、赤い宝石と剣のキーホルダーは輝きだした。

第八話　手に入れた魔法の力（後書き）

次こそは本当に戦いを書いていこうと思います。
まだ気が早いかもしれませんが第二弾も考えていますA，s見ていた人にはわかりますが闇の書の守護騎士を一人増やそうと思っています（パワーバランス的に）。
何かいい名前があれば、感想に書いて送ってください。

後書きの後書きのコーナー
ユ「やっと、セリフ付きで僕が出てきました」

作「ほんとにこんなんでやっていけるのだろうか・・・」

なの「がんばってくださいよー、この物語の神なんでしょ」

零「てか、これ終わってねー上にまだフェイトですら登場してねーのに
第二弾って気早すぎだろ」

作「いや、映画とかならここあたりで言うんじゃ・・・」

零「これ小説だからね、映画じゃないからね」

なの（ダーク）「少し・・・頭冷やそうか」

作「ま　た　か・・・」

零「やべっ」

なの（ダーク）「スターライト・ブレイカー」

作「ぎゃゃゃあああ。」

ぷすぷす

零「今のスターライトブレイカー黒くなかった？」

ユーノ「黒かったよね。」

このコーナーでなのはを怒らせないようにちかった二人だった。

零　なの　ユーノ「「「じゃあ、また次回」」」

作「マジで、死ぬかと思った」

零　なの　ユーノ「回復、早っ！！」

QB「僕と契約して魔法少女になってよ。」

零　なの　ユーノ　作「おまえは出てくるな」

第九話　戦闘開始（前書き）

戦い開始、うまく書けるかなー・・・？

第九話　戦闘開始

レイジングハートとレイナが輝くと同時に桜色と青色の光の柱が生まれる。

「二人ともなんて、魔力だ。」
ユーノは少し唖然としている。

その中桜色の光の方では

「はじめまして、新たな使用者さん。あなたに最適な防護服とデバイスを自動的に選択しますがよろしいですか？」
レイジングハートはなのはに聞く。

「はい！！」
となのはは答える。

青い光の方では

「はじめまして、新しいマイマスター。マスターに最適な防護服とデバイスにするけどいいかな？」
レイナは本当の妹みたいに聞く。

「ああ」
と零が答えた瞬間、二人は光に包まれた。

なのはは白を強調した映画版のバリアジャケットに、

零は、黒を強調した黒い長ズボンに白い服の上に黒い上着。

そして腕には銀色のガントレットが装着され腰には鞘とデバイスの１ｓｔモード桜の剣があり、眼が赤色になる。

二人は同時に地面に着地すると化物が二人めがけて突っ込んできた。

零は素早く鞘からニバンボシを抜くと刀でその攻撃を防ぐ。

「ぐっ・・・」

しかし、衝撃はかなりきた。

化物は腕のような触手を伸ばす。

なのはは空に飛んで回避、零はレアスキル・空間予想を使い死角から来る触手もニバンボシで斬っていく、すると化物はユーノの方へ突撃する。

それに気づいた、なのははユーノをかばうためにプロテクションを張る。

化物はプロテクションを破るため突っ込んできている。

「利き腕を前に出してください」

とレイジングハートに指示を出されなのはは言われたとおりにする。

なのはの手からシュートバレットが放たれ化物は吹き飛ばされ三つに分かれる。

化物は一目散に逃げ出す、二人も後を追うが追い付けない。

「あのビルの上へ行ってください」

と再びレイジングハートに指示されビルの上に着くとレイジングハートはシュートモードに変形する。

なのはの足元にミッド式の魔法陣が展開するとレイジングハートが
「よく狙って、トリガーを引いてください。」
なのははレイジングハートから送られてくるイメージを頼りに敵がロックオンされトリガーを引く。
「ディバイーン・バスターーー」
レイジングハートから桜色の光が放たれ化物二体を飲み込むが、一体外れる。
「後は、任せろ」
と零はなのはに念話で言うと、レアスキル・空間移動を使い敵の前に回り込む。
零の足元にミッド式とベルカ式のたして二で割ったような魔法陣が展開され、静かにつぶやく
「輝け、鮮烈なる刃。無限の悪を鋭く斬り裂き、対なすものを微塵に砕く。ジュエルシード封印、紅月狼影陣！！」
「ふういーん」
とレイナ言うと赤色の光があたり一帯を包み化物は青色の宝石に変わっていた。
なのはの目の前に二つ、零の目の前に一つジュエルシードが浮かんでいた。
ユーノはなのはに
「その宝石にレイジングハートで触れてみて」
と言われレイジングハートを近づけるとレイジングハートにジュエ

ルシードが取り込まれ
「封印完了」
とレイジングハートは言い蒸気を排出した。
零もニバンボシを近づけるとジュエルシードが取り込まれ。
「封印かんりょー」
とレイナは言い。

再び二人は光に包まれ変身する前の姿に戻りレイジングハートとレイナも元の形に戻る。

「ふーとりあえずは終わりか」
零は一息つくと後ろからウーウーウーとサイレンの音が聞こえ始める。

「もしかして、なのは達ここにいると大変あれなのでは・・・。」

「やべ、逃げるぞなのは。」
と零はなのはの手をひっぱり走り出す。

「「ごめんなさーい」」
と叫びながら。

第九話　戦闘開始（後書き）

戦いはやっぱり難しい、あと変身シーンは詳しくはユーチューブがニコニコ動画を見てくれ。

後書きの後書き

作「いやー、わかってたよわかってましたよ自分に戦闘シーンの描く才能がないことを後考えた技全部使うかわからないよ。」

零「まー変身シーンとか文を見れば手抜きってわかるけど」

なの「私的には、変身シーンが恥ずかしいからまだましだと思うけど」

零「そういやこれってＴＶ版と思えばいいのか映画版と思えばいいのか疑問だったんだけど」

作「とりあえずは両方だねバリアジャケットは映画版だけど」

レイナ「私セリフ少なかった。」

作「すいません、零が強すぎであまりアドバイスしなくていいと思ったもので」

零「そんなこと言ったら、こっちにとばっちりが」

作「大丈夫だ、さっきの戦闘でなのはは魔力を使いきってる」

零「なら安心だ」

ハーケーン・セイバー

作「えっ！！」

零「あぶねっ」

作者直撃（あまりにも悲惨な状況でとても文字化できません。）

作「まだだ、まだ終わらんよ」
と言って立ち上がる。

零「いい加減、復活はえーな」

作「神ですから、とりあえず零とレイナの声優考えてみたんだけど、
」

零「マジで！！」

レイナ「ホント」

作「では発表します零役は宮野真守さん、
レイナ役は藤田咲さんでーす。
零の方はＤＯＧ・ＤＡＹＳのシンク・イズミ
レイナの方は初音ミクみたいにしゃべってもらいまーす。」

零「まぁ、イメージはしやすくなったな」

レイナ「レイナレイナにしてやんよ」

作「単独起動だと」

ひゅんひゅん↑刀が回転して飛んでくる音

ぐさっ

作「なぜだ・・・。」

ばたっ

零　なの　レイナ　ユーノ「それじゃあまた次回」

番外編　そういえば忘れていたこと（前書き）

まぁいろいろテストとかあって疲れたので息抜きです。

番外編　そういえば忘れていたこと

作「やったー、テスト終わったー。」

零「まぁまだ追試とか残ってるがな。」

作「まぁ今回はそういうことは置いといて。」

零「そういえば、何、今回。」

作「そうそう、最近この小説を読み返してきずいたことがあるんよ。」

零「きずいたことって？」

作「レイナの正式名のことなんやけど。」

零「えっ、レイナって正式名称じゃなかったの！！」

作「うん、そうなんだよねー俺的には最初がエクスカリバーで強化後がエクスカリバー凛々の明星（ブレイブヴェスペリア）みたいな星の名前を入れたかったわけよ」

零「あー・・・」

作「でもよ、レイナ女の子設定にやったしエクスカリバーって他の小説にも出てるしなんかいい名前ない？」

零「急に言われても・・・もろＶｉｖｉｄのパクリやけどセイクリ

ッド・スターとかは？」

作「うーん、それねこの小説書く前から思いついてたんだよ強化後の名前は？」

零「うん、聞かれると思ったよじゃあセイクリッド・スター・デスティニーとかは？」

作「運命か、いいなそれさすがこの小説の主人公。」

零「じゃあこれでいいかなレイナの正式名称はセイクリッド・スターに決定しました。」

作「異論は認めぬぞ、あと強化後の名前は思いつきなので変わるかもな。」

零・作「じゃあまた後日」

番外編　そういえば忘れていたこと（後書き）

テスト頑張ったけどマジ無理です。
次こそは追試に引っかからないように頑張ります。

第十話　決戦後高町家の家族ユーノと出会う（前書き）

かなり久しぶりの投稿です。
いろいろなところを修正しました。

第十話　決戦後高町家の家族ユーノと出会う

タッタッタッ
再び気絶したユーノを抱えたなのはと零は警察に見つからないように夜道を走っていた。

「「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」」
二人が走っているとちょうど前にユーノを見つけた公園があり、少し長い階段なので下からは見つからないのでその公園のベンチで少し休むことにした。

「「はぁ・・・はぁ・・・ふー」」
呼吸をととのえると零がジュースを買いに自販機に向かった。

零が離れるとちょうど眼を覚ましたユーノが言いはじめた。
「すみません」
とつぜんあやまりだした。

「あっ、起しちゃた、ごめんね乱暴で怪我痛くない？」
なのははユーノが目覚めたのに気づくとユーノの体の心配をする。

「怪我は平気です、もうほとんど治ってるから。」
ユーノはきょうに包帯をほどく。

「ほんとだ、怪我の跡がほとんど消えてる。」
なのはは少し驚いている。

「助けてくれたおかげで残った魔力を治療にまわせました。」

「よくわかんないけどそうなんだ。・・・ねぇ、自己紹介していい？」
とユーノに聞くとジュースを買いに行き戻ってきた零はニヤリと笑い、きずかれないようになのはの後ろにジュースを持ってスタンバイしていた。

なのはは一回咳払いをすると。
「わたし、たかmひゃあ。」

なのはが自己紹介を始めた瞬間、零は買ってきた缶ジュースをなのはのほっぺにあてた。
「あははは、ひゃあって、あははは」

零は大爆笑しユーノも少し笑っていた。
「もぅ、零君ってば」
少し怒りながらなのはは缶ジュースを受け取りあける。

「僕は高町零、零って呼んでくれたらいいから。」
零がなのはの横に座り先に自己紹介をすます。

「私は高町なのは、零君と同じ小学三年生、家族や仲良しの友達はなのはって呼ぶよ。」
と笑顔で答える。

「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だからユーノが名前です。」

ユーノは言うとなのはは笑顔で
「ユーノ君か、かわいい名前だね。」
と言うと、少ししてユーノがうつむく

「すみません、あなたたちを巻き込んでしまいました。」
なのはは少し申し訳なさそうに

「あっ・・・その」
と小声で言い、また二コリと笑い。

「えっと、たぶん私、平気。」
と言い、零も

「僕も、大丈夫です。」
と答えた。

「さて、ここじゃユーノも落ち着かないだろうから家に帰ろう・・・
怒られるの覚悟で。」
零は肩を落としながら、なのははその言葉を聞いて

「にゃはははは・・・はー」
と笑いとため息を吐きながら、帰ることにした。

家に着くとなのははユーノを後ろに隠し、零はばれないように静かに戸をあけた。

すると後ろから少し怒った声で
「おかえり、こんな時間にどこにおでかけだ」
恭也が怒った表情で立っていた。

なのはがどうごまかそうと
「えっと・・・その・・・」

と言っていると反対側から

「あら、かわいいー」

と美由希が少しかがみながらなのはの持っているユーノを見ていた。

すると美由紀が助け舟を出してきた。

「なのははこの子のことが心配で様子を見に行ったのね。」

なのははきずいてないようでまだ

「えっと・・・あの・・・その・・・」

と言っていた。

恭也は怒りをしずめて

「気持ちはわからんでもないが、だからといって、内緒でというのはいただけない。」

美由希は恭也に

「まぁまぁ、いいじゃない零君も一緒だしこうして無事に戻ってきてるんだし。

それになのはは良い子なんだしもうこんなことしないもんね。」

となのはにウインクする。

零は聞こえないように小さな声で

「僕は？」

と言っていた。

なのはは恭也の方を向き

「その・・・お兄ちゃん内緒で出かけて心配かけてごめんなさい。」

となのはは頭を下げると零も一応、頭を下げた。

恭也は
「うん」
と小さく答え。

美由希は手を叩くと
「はい、これで解決、でもかわいい動物ねー、母さんなんか、この子見たらかわいすぎて悶絶しちゃうんじゃなーい。」
となのはに近づいてユーノを持ち上げる。

恭也は少し笑いながら
「その可能性は否定できんな・・・」
と肯定する。

家の中に入りリビングに入ると桃子と士朗はテレビを見ていた。
二人とも怒っておらず、恭也と美由希は黙っていてくれたようだ。
桃子はなのはが何か持っているのに気付きなのははテーブルにユーノを置くとすごい速度で桃子に抱えられ、頬ずりされながら
「わーーー、かわいいーーー。ほんとかわいい、わよねー。」
と何回も繰り返しており、なのはは
「お母さん、ほどほどにー」
というがほぼスルーされ、士朗はまだ覚えて無いようで
「なかなか、かしこそうなイタチじゃないか。」
と言うと、美由希に

「フェレットだよ、父さん。」
と指摘された。

「何か芸とかできるのかな」
と言い士朗が手を差し出すとユーノは仕方なく犬みたいに士朗の手に自分の手をのせる。

「おー」
「ほんとっかしこいわねー」
と桃子と士朗は感心していた。

その後、おおさわぎで、ユーノ君のえさのことやそのほかいろいろどたばたしていて魔法のことなど全く聞けなかった。

でも一応二人とも名前でよんでってことと普通に話してということだけだった。

第十話　決戦後高町家の家族ユーノと出会う（後書き）

もうすぐユニークが１０００突破結構、うれしいです。

後書きの後書き
作「ねーみー、すごく眠たい」
零「寝むらずに真夜中書いてたらそうなるって。」
作「だって最近更新できて無かったしそろそろしなきゃと思ってたんだよ。」
なの　ユーノ「健康管理は大切に」
作「なのはさん」
ウルウル
作「はじめて、制裁なしで心配してもらえた」
光をまとったリィン？サイズの人が近づいてくる。
？「がんばってよね、わたしも活躍したいんだから」
なのは　ユーノ　零「それ誰？」
作「あっ、いってなかったなレイナって人型になれるんよ。」
なのは　ユーノ　零「そうなんだ」
作「まぁ、人型でいてると同時に零の魔力が比例して減っていくけどね」
零「どうりでさっきから体が重いと思ったら。」
なのは「まぁ、かわいいから、いいじゃない。」
作「そうそう、どうせ零の魔力なんだし。
あっそうそう、この小説英語で、レイジングハートとかのセリフ、打とうかなーって思っていたんでしたが、英語マジで分かりませんので、みなさん自分の頭の中で英語変換してください。」
零　なのは　ユーノ「勉強しろ、勉強」
作「うっさいわ、小学三年が」
作友「そろそろ次回予告」

作「じゃあ次回、テレビ番未放映実質２．５話ドラマＣＤの内容をやっていきたいと思います。」
作友以外「じゃっまたねー」
作「つぎはプールだぜ。っていうかユニークがゾロ目で増えてんだが。」

番外編　悲しいお知らせ（前書き）

本当に皆様すみませんでした。

番外編　悲しいお知らせ

作「皆様、ほんとーにすみませんでした。」

零「いきなり、何あやまってんの。」

作「えー、大学の方のオープンキャンパスが近くにあり全く更新できませんでした。
ということと前話で次は水着ゲフンゲフン・・・ドラマＣＤの話にしようかと思っていたのですが一・二話遅れそうです。」

零「そーなんだ。」

作「ついでに夏だし、ホラーっぽい話も新しく執筆していこうと思います。
二・三日でアップしますのでそちらもよろしくお願いします。」

零「戦闘シーンでも思ったんだけど、ホラーなんて書けんの？」

作「なせばなる、人生はギャンブルだ。」

圭介「がんばってくれよ、作者さん。」

月絵「うまくいけば、赤橋君と・・・」
キュー、バタ。

零「誰だー」

作「ああ、新しい作品のキャラクターだよ。

他にもいるけど他のみんな用事で来れないんだ。」

零「そうなんだ・・・一人顔、真赤にして倒れたけど。」

圭介「大丈夫?、鈴木さん」

作「たぶん、大丈夫だよ。
ラブ要素はかなり少なめにするから。
てかっむしろ書けねぇー。」

圭介「はじめまして、零さん。
俺は作者さんのもう一つの小説に出ることになった主人公の赤橋圭介です。
今度は後書きに登場するかもしれませんのでまたよろしくお願いします。」

零「こっちこそ、よろしくお願いします。」

二人は握手を交わす・・・。

作「なんかＣＭのコ〇ン＆金〇一少年の事件簿のＣＭみたいな絵だな。
二人の身長的に。」

零「じゃあ、あっちの小説でもがんばってください。」

圭介「零さんも頑張ってください。」

作　零　圭介　月絵「じゃあまた、後日」

圭介　月絵「まだアップされてないけどＧｕ－Ｌもよろしく。」

番外編　悲しいお知らせ（後書き）

みなさんＧｕ－Ｌの方もがんばりますので期待しておいてください。

第十一話　仮修行（前書き）

皆様遅くなりました。
一応、零の修業です。

第十一話　仮修行

朝、四時三十分

「「やっ、はっ」」
道場内で美由希と零は竹刀を振っていた。
「残り、十回」
と恭也は腕組をしながら真剣な顔で言う。

「「はいっ」」
１０・９・８・７・６・５・４・３・２・１・０
二人は竹刀を振り終わると一息つき息をととのえている。
「ふー、意外とつかれるな。」
零は置いていたタオルを手に取り汗を拭いていた。

「零、どうだ？、続けていけそうか？」
「うーん、結構、疲れるけれどいい運動になりそうですし続けていこうかな」

二人の息が整ってきたので恭也は言う。
「零、体が温まっているうちに模擬戦やってみるか？」

「えっ、模擬戦ですか。
いいですけど、誰が相手ですか？」

「俺だ。」

「恭也さんですか、僕初心者だけど勝てるかなぁ」

「模擬戦はあくまで修行の一環、勝ち負けを気にしてる時点でそこから強くなれないぞ。
じゃあ、美由希、審判頼めるか？」

「いいよ、じゃあ三回勝負で先に二本とった方の勝利でいいね、二人とも位置について。」
二人は防具をつけ、竹刀をかまえて向かい合う。

「では、はじめ！！」
恭也と零の模擬戦が始まった。

「やっ」
零はすり足で恭也に近づき上段から竹刀を振りおろす。

「甘い」
恭也は最小限の動きでかわし、ガラ空きの脇腹に竹刀をふるう。

「ぐっ」
零は直撃し脇腹をおさえる。

「一本っ」
と美由希は言い恭也の方に手をあげる

「なかなか、いい動きだけど攻撃が丸見えだな。」

「絶対に一本、取ってみせますよ」
二人は位置に着くと零はさっきとは違う抜刀の構えをとる。

「ふっ、おもしろい」
と恭也のバトルマニアの血が騒ぎ始めた。

「じゃあ、二本目、はじめ！」
零はすり足で接近する。
「これで、終わりだ。」
恭也は竹刀を横に振る。
零は空間予想を使いとっさに後ろに下がり、恭也の竹刀は当たらなかった。
「なっ。」
零は一気に加速をつけ恭也の横に回り込む、恭也は防御するように竹刀を構える。
さらに零は横に短く飛び、恭也の背後をとると竹刀で一閃する。
恭也はぎりぎり防ぐが竹刀が飛ばされ零は一本取った。
「ふっ、なかなかやるね。」
「じゃあ、ラスト、はじめ！」
零はさっきと同じ抜刀の構え、恭也は居合の構えで全く動かない。
零は空間移動を使い一気に近づく。
ヒュン
零は一瞬何が起こったかわからなかった。
零は床に倒れ首筋に恭也の木刀があてられた。
「二本、恭ちゃんの勝ち。」

二人はもとの位置に立ち。
「「ありがとうございました」」
と礼し零はその場に座り込む。
「ふー、やっぱり駄目だったか、でも最後の一閃全く見えなかった。」
「ああ、最後のあれは居合と言って、一定範囲に入ったら瞬時に斬り裂くといった、零の抜刀術の動かない対攻撃用の技なんだ。」
「なるほど、つまり僕が近づいた瞬間、範囲に入って一瞬できられたってわけか」
零は美由紀から水を受け取り飲みながら言う。
「でも、零君もすごいよ恭ちゃんから一本取るんだもん。」
「たしかに、あの動きは驚いたな。」
恭也はタオルで汗を拭きながら答える。
『あっ、あれとっさにスキル使ったなんて言えない。』
「うーん、一応、カンで一閃したんだけど・・・」
「えっ、カンで恭ちゃんから一本取ったの！！」
二人は唖然としていた。
午前七時
修業を終え、汗をシャワーで流し、道場に戻り、学校の用意をし制

服に着替え終えると、丁度ユーノを肩に乗せたなのはが呼びに来た。
「おはよう零君、朝ごはんだよ。」
「おはよう、なのは、ユーノ」
「おはよう、零」
一通りあいさつを済ますと零となのははリビングに向かった。
午前七時三十分
なのははユーノを自分の部屋の段ボールに入れレイジングハートを首にかけ念話を楽しんでた。
『なのは、おいてくよ。』
ユーノと話してる中に突然介入してきて驚いた。
なのははカバンを持って
『じゃあユーノ君行ってきます。』
『行ってらっしゃい』
零は玄関でなのはと合流すると
「じゃあ行こうかなのは」
「「行ってきまーす」」
と二人同時に言い、出発した。
歩きながらなのはは零に聞いてきた。
「さっき、ユーノ君と念話で話してた時、零君も話に入ってきたけど零君、念話の仕方知ってたの？」
「うーん、昨日の夜、とっさにしたからわからなかったけど、昨日、寝る前レイナにやり方を聞いてたんだ」

「そゆこと、はじめましてなのはちゃん」
小さい手のひらサイズの女の子がなのはの前に現れた。
「えっ、誰なの？」
「ああ、僕のデバイスのレイナだよ。
僕の魔力を使う代わり、人型になった方が話しやすいから人型になってもらったんだよ。」
「そうなんだ、はじめましてレイナちゃん、そういえば昨日、いつ念話したの？」
「えーと、なのはが砲撃魔法、一発外れてから僕が敵に接近するときかな」
「へー、そうなんだ、それはそうと学校でレイナちゃんのこと、どう言うの」
「学校ではキーホルダーになってもらうことになったよ。」
「ねーねー、マイマスター、なのはちゃん乗るバスってあれじゃないの。」
レイナの指さす方向を見るとバスがすでに来ていた
「やばっ、走るぞなのは。」
「うん。」

・・・・・・・
ぷしゅー
「「はあ・・・はあ、間に合ったー」」
なのはは一息つくとすずかとアリサを見つけて一番後ろの席へ、零はあいてる席の窓側に座り、空を見ていた。

第十一話　仮修行（後書き）

後書きの後書き

作「今回の感想は一応なしです」

零　なの「かなり更新遅くなったのに」

作「大学生はマジでいそがしいの新しく作品も書いてるし。」

圭「おーい、零ー、作者、友達連れてきたぞー」

なの「だれなの？」

零「ああ、あの黒髪の方は赤橋圭介、青髪の方は知らないな。」

作「あの人たちは、もうひとつの作品Ｇｕ－Ｌのキャラたちだよ。」

零「久しぶり圭介」

圭「ひさしぶりだな、零」

なの「はじめまして、赤橋君、わたしは高町なのはって言ます。」

圭「はじめまして、なのはさん、俺のことは圭介でいいよ。」

？「圭介、そろそろ俺、自己紹介したいんだが。」

圭「じゃあどうぞ」

隆也「Ｇｕ－Ｌの方で圭介の親友の七瀬隆也だ」

零「はじめまして、隆也さん。
そう言えば前、どうしてきて無かったんですか」

隆也「ああ、圭介が鈴木さんから預かってたペンダント直してたんだ。

圭介、完璧に直ったぜ。」

圭「ありがとう、隆也」

隆也「いいって、たまにはお前もいいとこ見せろよな。」

圭「ははは、ウルせぇよ。」

なの「本当に二人って仲がいいんですね」

隆也「まぁ、中学からの付き合いだしな」

作「そろそろ、俺が空気になるから切り上げるか。」

なの　零「「じゃあまた次回」」

圭　隆也「「Ｇｕ－Ｌもよろしくな」」

作「次回は、話を飛ばし待ちに待った水ｇゲフンゲフン・・・ドラマＣＤの内容をしたいと思います。更新遅くなると思いますがお楽しみにしておいてください。」

第十二話　夏だ！プールだ！水着だ！　前編（前書き）

更新遅くなりました。
今回から念話は『』になります。
前回の話の流れからかなり飛びますが前々から予告してた水着会だ
ー

第十二話　夏だ！プールだ！水着だ！　前編

前回、その日の放課後、生物を取り込んだジュエルシードを封印した

・・・一カ月後・・・

ジュエルシードの反応もなく、初めの戦闘の3つとユーノが封印した1つ・前回の1つで合計5個のジュエルシードが集まっていた。

結果としては上々なのだが、やはり二人とも魔法に関しては初心者なのでなのはは、ほぼ毎日、零は剣道の練習のない日、とある公園でユーノが結界を張りその中で魔法の練習をしていた。

そして今日はなのはとユーノと零が練習していた。

「そう、集中して心の中のイメージを描いて」

「うーん」

「そのイメージをなのははレイジングハート、零は剣に渡して」

「うん・・・レイジングハートお願い」

「スタンバイレディ」

「いくぞ、レイナ」

「イメージと魔力を込めて、呪文とともに一気に発動」

「瞬け、明星の光、喰らいやがれ、天翔紅翼剣」

魔力は集まらず不発に終わった。

「イメージを魔力に・・・リリカルマジカル、えーと、捕獲魔法発動」

バキバキバキ
「やった！！成功？」

「いや、してない」
何本もの木を薙ぎ倒し、なのはの魔法は制御を失いこちらに向かってくる。

「え？ふぇぇぇ」
「あぶね、守護結界」
とっさに防御魔法を張り無事だった。

「なのは？零、大丈夫？」
「ああ、なんとか」
「私も零君が守ってくれたから」

「ふー、でもなかなかうまくいかないな」
「そうだね」
「いやそうでもないよ一カ月でここまでできるようになってるんだから」
「うーん・・・そうなのかな」

「俺の封印魔法、紅月狼影陣も練習だと失敗しやすいし」
「それは、マスターが実戦派という証拠だよ」
人型に戻ったレイナに指摘される。

なのはと零のケータイ（ケータイがないと不便なので少し前士朗に買ってもらった）が鳴る。
「あ！もう朝ごはんの時間だ」

武装を解いた零も

「そうですね、そろそろ戻りましょうか」
「じゃあ今朝はここまで」
「うん、ありがとうレイジングハートまたあとでね」
「グッバイ」
レイジングハートは待機状態の赤い宝石に戻る。
「はぁ、攻撃とか防御とかの魔法は何とかコツがわかってきたんだけどなぁ。」
「僕も下級の技なら完璧に使えるんだけどね。」
「私のマイマスターは剣技で一応補ってるけどね。」
「なのははエネルギー放出系が得意みたいだからね・・・元の魔力が大きい分、収束や圧縮とか微妙なコントロールが苦手なんだよ。」
「その・・・それは私が力任せで大雑把な性格ということでは」
肩を落としながらなのはは言う。
「え！いやそうじゃないよ」
「えっ、いつも力任せに砲撃撃ってると思ってましたよ」
「でも、とりあえずは大丈夫、なのはもだんだん魔力の扱いに慣れてきたみたいだし、完全になるまでは僕がサポートできるはずだから」
「そうなの？」
「うん、少し魔力も戻ってきたしもともと結界や捕縛・封印などの魔法は得意なんだ」
「たしかに動きを止めてくれたら僕の剣技もなのはの砲撃も当てや

すくなりますね」

「でも、ジュエルシードの封印するには僕の魔力では」
なのははユーノを持ち上げ

「大丈夫、それは私と零君でばっちりやるから。
大きな魔力で遠距離魔法が得意な私と接近戦が得意な零君が封印。
補助魔法が得意なユーノ君は魔法の先生で封印のサポート、相性ばっちりのチームだよ。
だから大丈夫、私達三人ならきっとね。」

「そうだね」
「なのは、零」
「さぁ、帰ろう、今日も元気に朝ごはんだ」
「うん」

・・・・・・

ガララ
「あっ、なのは零君、おはよう」
「おかえり」
「あ、お兄ちゃん、お姉ちゃん、おはよう、ただいま」
「おはようございます。恭也さん、美由希さん」
「なのはは今朝もユーノのお散歩で零君は自主トレ？」
「うん」
零も首を縦に振る。

「しかし、ユーノも本当に変わったフェレットだねー、お散歩が好きなんて」
「キュ」

「よしよし」
ユーノは美由希に頭をなでられていた。
「「まっ、なのはに早起きの習慣がついたのはいいことだな（ですね）」」
みごとに零と恭也がハモる。
「あっ、そうだ二人とも今日の準備ちゃんとしてある？」
「今日？」
「なにかありましたっけ？」
「キュ？」
三人は思い出せない。
「ほらバス通りの向こるにうにできた新しいプールに放課後みんなでかけるって」
「あ！！うん、大丈夫」
「そういえば言ってましたね」
『ん？』
『ユーノ君が家に来る前にした約束なんだ、新しくできた温水プールにみんなで行こうって』
『プール？』
『せっかくだからユーノ君も一緒に行こうね』
『え！！』
『ペット、大丈夫だからですね』
『うん』
念話でほぼ強制的にユーノは連れて行かれることになった。
「お兄ちゃんもいっしょだよね？」
「俺は現場の手伝いだけどな、監視員だ」

『えっ、僕も一緒って・・・えっ、あの』
「なのはも行くの初めてだよね。
遊べる施設もいっぱいあって楽しいらしいよ」

『えっ、なのは。
ねぇ、なのはちょっと』

「アリサちゃん達と一緒に楽しみにしてたんだ」

『って、聞いてないね。』
『大丈夫ですよ、僕は聞いていましたから、まぁ、ドンマイ』

・・・
キーンコーンカーンコーン
「さて、授業終わり」
「準備ＯＫ」
「僕も大丈夫ですよ」
「それじゃあ待ち合わせの場所に」
「「「「しっぽーつ」」」」
息もぴったりに四人は教室を出る。

第十二話　夏だ！プールだ！水着だ！　前編（後書き）

もうちょっと待ってください。
すごく長くなりそうです。
後書きの後書き
作「ふふふはーははは、やったついにきたぞ夏休みが」
零「やっと勉強漬けの毎日から解放されたらしく、テンションたけーな」
なの「この人が作者だと少し泣きたいです」
作「本当に長かった、オープンキャンパスの手伝いをして、徹夜でテスト勉強して・・・そしてついに私は帰ってきた、さぁ祭りの日は一つ大きな花火を打ち上げようじゃないか。」
零・圭「ちょっと、黙れー」
ドロップキック炸裂
ズザザザー
零・圭「よし！」
作「よくねーよ」
なの「はやっ」
零・圭「ちっ」
作「いったい何、いきなりドロップキックって」
圭「まぁ、それはノリなんだけど俺たちの話いつ更新なのかなーって思って」
作「・・・」
圭「あれ？」
返事がないただの屍のようだ・・・
圭「逃がすか」
作「すいませんでしたこっち考えるのに必死でそっちまで手が回らなかったんですよ。」
圭「まぁ、いいや今度連日投稿しろよな、しなかったらなのはさん

よろしく」
なの「ぼっこぼっこにしてやるの」
作「サーイエッサー」
ビシッ
零・ユーノ「さて次回は中編だ、なのは達が水着になるけどエロ要素は全くないからながっかりしろ」
全員「じゃあーまた」

第十三話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　１（前書き）

前回の続きです。

第十三話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　1

授業も終わり教室を出た四人は廊下で雑談をしながら下校しようとしていた。

「午前中、授業って楽でいいわねー放課後、いっぱい遊べるしさ。」
「うん、そうだね。今日のプール、楽しみ楽しみ。」
「ちゃんと水着持ってきた？」
「うん、もちろん」
「泳ぐの好き好き。」

「そういえば、僕って記憶ないからよくわからないんだけど泳げるのかな？」
「泳げなかったら、私と一緒に美由希さんかノエルさんに泳ぎ教わろうよ」
「そうですね。」

「うきわ使ってもいいみたいだから、ファリンに持ってきてもらってるよ。」
「それもいいけど、やっぱり一緒に教えてもらう人がいれば頑張ってみよーかなー」
「二人ともがんばれー。」

「あの、なんで僕、試してもないのに泳げないことになってるの。」
「天気もいいし、うきわでプカプカもいいなー」

そういった会話をしながら、零達が学校を出ると、一台の車が近づいてきた。
「すずかちゃーん」

「ファリン」

「アリサお嬢様、なのはお嬢様お迎えにあがりましたよ？」
「「ノエルさん、ありがとうございます。」」

「どうして、疑問形？」
「えっと、あなたは？」
「えっ、すずかさんから聞いていませんか？」
「ああ、あなたが零君ですか、はじめまして月村家でメイドをしているノエルといいます。」

「はじめまして」
「じゃあ行きましょうか。」

・・・

全員車に乗り込むとなぜかノエルさんとファリンさんが笑顔でいて、すずかが顔を赤くしていた。

「大丈夫ですか？」
それに気づいた零はすずかに聞く。
「大丈夫・・・です。」
すずかはさらに顔を赤くして答える。

「それはそうと、美由希さんは現地集合ですか？」
「うん、ユーノ君も一緒に」
「ふふふ、なのは、もうユーノとすっかり仲良しね」
「にゃははは」
「ユーノ君かしこい子でいいよね」
「うん」

零は会話に参加せず空を見ていた。

第十三話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　１（後書き）

皆様すみません。
今回、急用が入ったのでここで次回へ
今回の後書きの後書きはお休みさせていただきます。
本当にすみません。

第十四話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　2（前書き）

長らくお待たせしました。
前回と前々回の続きです。

第十四話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　2

零は空を眺めながら言った。
「そういえば、僕、泳ぐのってはじめてだなぁ・・・まぁ記憶がないからわからないけど、泳げなかったら僕も泳ぎ方を教えてもらおう。」

・・・同時刻　高町家・・・

「先日、海鳴市みさか町で発生した市街地の壁が突然壊れた事件ですが・・・」

ユーノはフェレットの姿でリビングのテレビで先日の戦いの被害が報道されていたニュースを見てた。
「次のジュエルシードはまだ見つからない・・・あまりなのはと零にたよってもいけない、僕がもっと頑張らなきゃ。」

玄関の門が開く、音が聞こえユーノはすぐにテレビの電源を切る。
「ただいまー、って誰もいないか」

美由希が家に帰ってきてリビングにいるユーノにきずく。
「あ、ユーノただいま」
「キュ」
「またカゴから出ちゃたの、もうすっかりはなし飼いだね。」
「キュウ」
「まぁ、いっかユーノは良い子だもんね」
「キュ」
「よしよし、さぁ今日はみんなでプールだよ私は着替えてくるからユーノはここで待ってるんだよ。」

「キュ」

・・・数十分後　プール・・・

ピッピー

「プールサイドは走らないでください、危ないですよ」

「ごめんなさーい」

恭也がプールの監視員姿をしていた。

「あっ、恭也さんだー」

声が聞こえた方に恭也が振り返る。

「アリサ、早いな一番のりか？」

「零は向こうで準備体操してるし、なのはとすずかたちは、着替えています」

アリサは赤色のビキニを着て答える。

「そうか」

「恭也さん、なんか監視員姿似合いますね」

「そうか？」

「あっアリサちゃーん、お兄ちゃーん」

なのはが薄ピンク色のスクール水着タイプの水着姿で歩いてくる。

「恭也さん」

すずかは白紫色のスクール水着タイプの水着姿でなのはより少し遅れて歩いてくる。

「こんにちはー」

ファリンも紫色のスクール水着タイプの水着姿でノエルは白のビキ

ニ姿ですずかと一緒に歩いてきた。
「こんにちは、恭也様」
「ああ、そういば美由希は？」
「えーと、お姉ちゃんとユーノ君はもうすぐ」
美由希が黒いビキニ姿で少し小走りで来た。
「おまたせー、おお恭ちゃん監視員姿似合う」
「そうか？」
「あっ、いたいた、おーいみんなー」
零も体操が終ったので小走りで合流した。
「恭也さん、すごく監視員姿似合いますね。」
「そうか？」
「うん、似合う似合う」
「キュ」
「で、こっちはどう今年のみんなの水着姿は？」
「ビビット決めてみました」
「えっと、その、零は？」
零は目のやり場に困っているみたいでうつむいていた。
「セクシー？」
恭也はかんねんしたみたいで
「うん」
と短く答えた。

第十四話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　２（後書き）

もうそろそろネタが

後書きの後書き
作「いやー結構期間があいちゃたねー。」
零「そうですよ、この前の急用何だったの？」
作「旅行行くことになっちゃてさ二泊三日のさすがにずっとパソコンつけとくのもやばいかなーて思い前回みじかかったんだよ」
なの「じゃあ残りの期間は？」
作「やる気が出なかったのと、弟に途中まで書いていたのを消されたのと、ネタが思いつかなかったの三つですね。」
零・なの「だめ作者め」
作「あっ、そうそう、はいお土産、零とレイナさんにはゆずアイス、なのはさんにはゆずケーキです」
零・なの「あっありがとう」
零となのはが受け取ると突然作者が吹っ飛ぶ
零・なの「？？？」
圭「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ、即効魔法発動バーサーカーソウル、このカードはイライラをＭＡＸにして発動、作者にのみ追加攻撃できるのさ、さぁいくぜまず一回目」
作「ぐほっ」
圭「二回目」
作「がはっ」
・・・その後、三十回は続いた。
・・・ちーん・・・
零「意外とさっぱりしてておいしかったな。
そろそろＬＰ０なんじゃね」
なの「こっちも適度の酸味がおいかったよ。

いったいなにがあったの」
圭「こいつまだ俺らの話アップしてねーんだよ」
零・なの「えっ」
作「俺の引いたカードは死者蘇生、さぁ俺よ死より蘇生し天を舞え炎をまといし創造主となりてー」
圭「うっさいわー」
作「ぐふっ・・・すいませんでしたー。
マジでネタが思いつかないのホント勘弁してください」
なの「悪魔らしいやり方でやってもらうから」
ガシッ
作者を止める音
作「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ」
なの「全力全壊・スターライト」
？？？１「響け終焉の笛・ラグナロク」
？？？２「雷光一閃・プラズマザンバー」
作「やっやめろそんなことしちゃいけない」
なの・？？？１・？？？２「ブレイカーーー」
作「トラップ発動ディバインウィンド」
無意味だった。
作「マジで死ぬー、ぎゃあああああぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・」
零「うわーーひでぇ」
作「中編いつまで続くのかな？」
なの・零「えっまだ続くの」

第十五話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　3（前書き）

遅くなりすみません
少し凹んでいました

第十五話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　3

恭也達が話している間なのはは、ユーノと念話で話していた。

『ユーノ君ごめんねなんか強引に誘っちゃたみたいで、でも夕方からまたジュエルシード探しするから。』

『うん、でも今からは気にしないでみんなとたのしく遊んでよ。』

『うん、ありがとうユーノ君』

なのははユーノとの念話を終わらすと美由希があたりを見回しながら言う。

「でもここすごいね飛び込みプールあるし、流れるプールあるし」

ファリンは事前に調べていたみたいで

「あっちにはお風呂がありますよ」

「それは素晴らしい」

「ノエルお風呂好きだもんね」

すずかが呆れたように答えていた。

その呆れ用からどんだけ好きなのだろうと疑問に思った少年が一人いた。

ユーノは真剣な表情であたりを見回していた。

『ん？ユーノどうかしたか？』

『どうやら、なのははきずいてないみたいだけど、かすかに魔力の気配がする、だれかの強い願いにジュエルシードがそれに反応しようとしているみたいだ。』

『とりあえず、僕は警戒しておくよ。』

零はすぐにジュエルシードが発動・暴走し戦闘開始できるようにレイナをとりに行こうとする。
「ごめん、みんなちょっと忘れ物したからロッカーに取りに行ってくるよ。」
一応、言ってロッカーに向かう。

「あれ？零君は？」
「どこ行ったんだろ？」
なのは達があたりを見回す。

「ああ、さっき忘れ物したから取りに行くって言ってたぞ」
恭也が答える。

「まぁ、いいわ、それより恭也さんあれ何ですか。あのお立ち台みたいなの」
「ああ、そのまんまだよ、希望者が歌って踊れるステージなんだ」

「「「「「「「えー」」」」」」」
「こんな場所で歌ですか」
「いや、これが結構人気あるんだよ、ついさっきも女の子たちが歌ってたし」

アリサが提案する
「えへへ、だれかうたう？」

「私は、いいよ」
すずかは横に首を振る。

「私もごえんりょう」
なのはも手を振り拒否する。

「美由希さん？ファリンさん？」
「ダメダメ、私歌下手」
「私なんかもっとです」
全員拒否しているとノエルから助け船が出される。
「やはりここは言いだした方が先陣をきるべきでは、ねっアリサお嬢様」
美由希がわるのりする
「アリサの歌を聞いてみたい人」
「「「「「はーい」」」」」
全員が答える。

「えー、やぶへびだわ、これは何かの罠？」
恭也は案内する
「ほら、受け付けはあっちだよ、アリサ」
「がんばってアリサちゃん」
「ファイト」
なのはとすずかから声援が送られる。

「いいわ！泳ぎ前の景気づけ、気合い一発歌って見せようじゃないの」
「「「「「いえー」」」」」

「うー」
アリサはうなりながらも受け付けに向かう。

タッタッタッ
「はぁ・・・はぁ・・ふー、ただいま」
零がみんなと合流する。

「あっ、お帰り零君」
「あれ、アリサは？」
聞いた瞬間、いきなり会場で歓声が上がる。

「では、次の参加者、アリサさんどうぞー」
舞台の上にアリサが現れる。
「では、歌ってもらいましょー、曲はＦＩＲＳＴ　ＣＯＮＴＡＣＴ
よろしくおねがーいしまーす」
・・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・
パチパチパチ
歌い終わると会場から大拍手
そしてアリサは退場していく
「アリサさん、ありがとーございましたー」

・・・・

第十五話　夏だ！プールだ！水着だ！　中編　３（後書き）

ＦＩＲＳＴ　ＣＯＮＴＡＣＴは緋弾のアリアのアリアのキャラソンです。
完全声優ネタです。

後書きの後書き

作「夏休みが終わっちまったー」

零「今回はなんでこんなに遅れたの？」

作「ちょっと、やる気が出なかったのと夏バテと凹んでたり、ネタが思いつかなかったの３つだね」

零「まぁ前回の後書きであんなことされたらそら凹むけどさやる気は自分で出すもんだろ？」

作「だってさー単位があまりとれなかったし、前あんな攻撃されちゃたらね」

零「まぁ、がんばれ」

作「あっそうそう、最近、携帯がぶっ壊れてさ凹んでたんだよ」

零「なんか大事なデータでもあったの？」

作「うん」

零「まあドンマイ」

作「そういえば、あるラジオでさー俺の出したメール読まれてちょっとうれしかった」

零「へー」

作「じゃあネタもねぇしそろそろ」

零・作「じゃあまた次回」

番外編　〇〇が××だったら（前書き）

ＰＶ１００００アクセス越え記念です。

番外編　〇〇が××だったら

作「まさか、ここまで来るとはな。」
なの「こんな、いきあたりばったりの小説で」
零「まあ、めでたいし、ってかまだ折り返し地点にまで来てないのにな。」
作「では今回は少し思いついた話です。なのはシリーズでちょっとキャラ達のセリフを変えたりしたり性格を変えたりします」
なの「では、はじまります」

・・・A’s最終話・もしもなのはが空気を読めなかったら・・・
リィン「ああ、来てくれたか」
なの「リィンフォース・・・さん・・・雪降っているのにそんな薄着で寒くないんですか」
リィン「正直、すごく寒いです」

・・・STS・8話・魔王降臨・もしも模擬戦の相手が零で零の魔王降臨だったら・・・
零「さてと、じゃあ2対1で模擬戦を始めようか、まずはスターズからだ、バリアジャケットを装備しな」
スバ・ティア「はいっ」
（少しカット）
ティア「やるわよ、スバル」
スバル「うん」
（ふたたびカット）
ティア「クロスファイヤー、シュート」
（またまたカット）
零「甘いしコントロールが悪すぎだ。・・・ん、ウェーブロード、スバルか」

スバル「うぉぉぉー」
零「まさか、フェイクじゃない、こんなのなら撃墜されて一発だぞ」
スバルのリボルバーナックルと零の剣がぶつかる
零「甘い、紅破刃」
防いだ方じゃない剣で紅破刃をはなつ
スバル「うわぁぁぁ」
零はティアのクロスファイヤーを最小限の動きでよけながら言う
零「スバルてめぇ、そんなに早く死にてぇのか」
零がかけていたメガネをはずす。
スバル「すいません、でもちゃんと防ぎますから」
零（何をだ？）「そういえば、もう一人は？・・・そこか！！砲撃・・・バカかあんな丸見えで撃墜してくださいって言ってるようなもんじゃねぇか」
ティア「特訓成果クロスシフトC行くわよスバル」
スバル「おう」
リボルバーナックルから薬莢が一つ飛びだす
スバル「でりゃぁぁぁ」
零「紅破連刃」
いくつもの紅破刃が飛んでくるがスバルはそれを前弾回避し再び、剣と拳がぶつかる
スバル「くっ・・・ぐぅー、ティア」
（恒例のカット）
ティアはウェーブロードの零の頭上を走っていた
ティア「防御されないくらいの至近距離で斬り裂く」
すると零の目から光が消えた。
ティア「一撃必殺、でぇぇぇい」
零「レイナ、ブレードモードオフ」
レイナ「うん、わかった。」
（またまた恒例のカット）
零「てめぇら、一体どうした？がんばってるのはわかるが喧嘩じゃ

ねえぞ、練習の時になのはの言うこと聞いて本番で無茶をするなら訓練の意味がねぇだろ」
スバルの拳とティアの刃を素手で受け止めて言う、二人は唖然としているが模擬戦を見ている、なのは達にはわかった、零が完全にキレているということに。
ティアが刃を解除して後ろのウェーブロードに飛ぶ
ティア「私はもう誰も傷付けたくないから、無くしたくないからだから強くなりたいんです」
ティアは泣きながら再び銃を構えスバルの拳が緩む
零「セットアップ、少し頭を冷やしやがれ小娘どもが」
零が一本剣を呼び出す
ティア「ファントム・ブレｉ・・・」
零「紅月火竜陣・五連」
スバル「ティア！！、なっ」
零が一瞬でスバルの前に移動し
零「紅月狼影陣」
なの「ちょっと零君」
零「今回は二人とも撃墜され終了・・・だな」
そして、零は再びメガネをかけなおした。

作「と、なるわけです」
零「てっ言うかキャラ崩壊しすぎじゃ、後ＳＴＳのとき僕ってメガネかけてるんですか」
作「うん、そうだよしかもシャーリーお手製のリミッター付きメガネ」
零「なぜ、リミッター付きのを？」
作「まぁ、それは後の話で・・・それと明星二号をロスト・ロギアにしちゃうので出てくるのがかなり遅くなっちゃいますご了承ください。」

番外編　〇〇が××だったら（後書き）

零「そういや、なのはは」
作「そこ」
なの「私、魔王じゃないもん、魔王じゃないもん」
零「なんかすごい、いじけてるんだけど」
作「まぁ、A' sでは悪魔、STSで魔王だもんそりゃね」ニヤ
零「今、何を笑った」
作「いや、なのはさんを管理局の白い天使のままにしようと思い、零に悪魔&魔王化してもらおうかなって」
零「な・ん・だ・と」
なの「ぜひ、お願いします」
作「よし、まかせろ」
零「そういや今回出た魔法本編で出るの？」
作「まだ決めてないけど一応説明を」
紅破連刃　（こうはれんじん）
対象　一人～複数人
紅破刃を大量に放つ

紅月火竜陣・五連　（こうげつひりゅうじん・ごれん）
対象　一人
シグナムさんの火竜一閃を零風にアレンジした技。
結界に閉じ込め五匹の龍の形の火が中で暴れまわる。
簡単に言うとガッシュに出てくるティオのギガ・ラ・セウシルのなかで炎をまとった五匹のバオウ・ザケルガが暴れまわるみたいか感じ。
（ガッシュ知らない人すみません）
作「まぁこんなもんかな」

零「俺、やばくねチートじゃね」
作「いやいや、零はめったなことではメガネをはずさないようにするし、ほぼメガネをはずすときはキレた時か敵が強い時のみだから、ついでにメガネをつけた状態で紅月火竜陣・五連、使うとリアルで死ぬから」
零「やべぇ」
作「じゃあ今回はここまで、またＰＶ２００００アクセス越えたらします」
作・零・なの「じゃあ、また」
なの「できれば、鬼教官の称号も返上したいんですが」
作「それは無理です」

番外編　少し思いついたこと（前書き）

本編、進めたいのですがネタが思いつきません。

番外編　少し思いついたこと

作「うーん」
零「？・・・どうした？」

作「いやー、最近読み直して、思ったんだけど、２ｓｔの技が少ないなーって」
零「まぁ、たしかにな？」

作「だから、なんか応用して奥義とかできね？」
零「うーん、例えば？」

作「ＴＯＶのラピードのライトニングモーメントみたいなやつとか？」
零「でも、一応、シルファリオン以外ほぼパワー重視だし、後、大剣だしね」

作「うーむ、例えば連続で技を発動させるとか、ＲＡＶＥのハルの使ってた爆龍のＴＵ・ＢＡ・ＳＡ（翼）とか複数の属性を付与させたりとかさーできねぇの？」
零「できねーこともないけど、対なす属性付与で無になるとやべぇしな」

作「じゃあ、発動してちょっと違う効果をつかったりとかはどうかな、例えば天狼滅牙・風迅を上から打って行動不能とか」
零「まぁ、思いついたら使っていくよ、例えば、エクスプロージョン・奥義・爆龍の翼、みたいにね」

作「なんか、ＦＦのコマンドみたいやけどな」

零「まぁ、これ自体とっさに思いついたんだけどな」
作「そういや、おまえって技コピーできたっけ？」
零「えっ、無理だけど、まぁ見ように見まねなら何とかなるかも」
作「じゃあ、この技は？お願いしますフェイトさん」

フェイ「ハーケン・セイバー！！」
作「フェイトさんありがとう、じゃあ後日、登場回のとき、よろしく」

零「なるほど、魔刃を飛ばす技か、いいねいいね最高だねぇ」
作「なぜ、一方通行（アクセラレータ）？で、できそう？」
零「ちょっと、ためしていいすっか？」
作「どうぞどうぞ、あっこれおいとくね」

ゴトッ
零「的か、ありがとう、じゃあレイナセットアップ、モード１ｓｔ桜・・・ハーケン・スラッシュ！！」
作「？・・・何も起こらないけど」

キンッ（刀を鞘に戻した音）・・・どさっ（的が二つにずれて落ちた音）
作「！！まっ真っ二つになってる」
零「いやー人間やろうと思えばできるんだね」
作「たぶんそれお前だけだよ」
零「じゃあ、そろそろ終わろうか」

作「そうだね」
零・作「じゃあ、また次回」

番外編　少し思いついたこと（後書き）

えーと前に言った次回作の闇の書の守護騎士の名前がいろいろ思いついたのですがどれがいいのかわかりません。

1、ムジカ

2、ジン

3、ソラ

一体どれにすれば・・・できればアンケートを取りたいと思います。

出してほしい名前の番号を打って感想に送ってください。

期限はこの作品が終わるまで投票が多い名前に決定します。

では、よろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2837t/

魔法戦士リリカルなのは 1st　memory

2011年12月28日05時51分発行